

琉球大学学術リポジトリ

「学生による授業評価」に対する評価と提言

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道田, 泰司, Michita, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42025

「学生による授業評価」に対する評価と提言

教育学部 道田 泰司

本稿では、「学生による授業評価」を私が現在どのように活用しているかを紹介し、授業評価に対する私の基本的な考えを示し、今後の授業評価のあり方に関する提言を行う。

■ 1. 私が行っている、「学生による授業評価」活用法

私は、共通教育で行われている「学生による授業評価」を、主に次の2つのやり方で活用している。ひとつはWebページを用いた活用、もうひとつはシラバスを用いた活用である。

Webページを用いた活用は具体的には、評価結果を集計し、自由記述を分析したものをWebページに載せることで、1997年度以降の全ての評価を一覧できるようにしている (<http://www.cc.uryukyu.ac.jp/~michita/educ/nin-eval.htm>: 大人数の講義形式授業のみ)。たとえば昨年で言うと、学生から出された「この授業で改善すべき点」として、「人間の発達していくなかでの人格形成は、なんか高校の延長みたいな感じがしました」という意見があり、それに対して私は、「高校で、発達に関してどんなことを勉強したか、確認しておく必要がある。そして、それとの違いを強調せねば」とコメントをつけている。このコメントは、そのときの受講学生に直接フィードバックできるわけではないが、上記のWebページで公開しているので、見たい学生は見ることができる。

これは、評価結果を私なりに分析し、次年度の講義に活かすことが目的なので、必ずしもWebページで公開する必要はない。しかし、Webページを用いることは、絶対ではないにしても、非常に重要な役割を果たしていると考えている。それは、上述のように、受講生がそのときの講義の評価結果全体や、評価に対する講義者の考えを後から知ることができる、というだけではない。講義者は、わざわざWeb

ページに記述しなくても、評価結果や自由記述を見るだけで、それなりにコメントや改善策は思いつくであろう。しかし、それを文章化しWebページに載せるということは、単に頭の中で考えるのに比べ、他者の目を意識しつつきちんとした文章にするために、よりきちんと、深く考える必要が出てくるからである。

さらには、Webページ上に毎年の授業評価結果を蓄積していくことで、私自身アクセスしやすくなる。こういうものは、文書としてどこかにしまってしまうと、どこに行ったか分からなくなることがあるし、しまいこんだまま見なくなることも多い(実際、Webページに載せるまでの授業評価結果は、そういう状態であった)。しかしWebページに載せ、トップページやメインページからリンクを張っておけば、その存在を忘れることはないし、新しい評価結果を追加するときや何か思い立ったときに、何度も繰り返して見る可能性が高くなる。そういう意味で、結果をWebページに載せることには、大きな意味があるのである。

私が行っている「学生による授業評価」活用法の2つ目、シラバスを用いた活用は具体的には、大学教育センターで毎年発行しているシラバスの中に、所定の内容に加えて、前年度の授業評価で得られた意見(この授業の良かった点と、この授業で改善すべき点)を3つずつほど抜粋して載せている。このようにするのは、「授業内容を紹介し、学生が授業を選択する際の情報を提供する」というシラバスの目的を考えたとき、受講生の目から見た私の授業を示すことは、大きな意味があると考えからである。いわば、学生が授業についての情報交換を口コミで行うような部分を、シラバスの中に載せてしまうのである。

これは、単なる情報提供という意味だけではない。

たとえば「考えさせられる授業だった」「レポートが大変だった」という学生の意見を示すことは、この授業を受講するに際しての学生の心構えを示すことになる。すなわちこの講義は、考えることを要求し、学生が「大変」と感想を漏らすようなレポートを課す授業であることを学生に知らせるのである。それは、そのような授業がいやな学生には向いていない授業である、というメッセージとして作用する。単にどういう趣旨でどのような内容の授業を行うのか、という情報提供以上に、受講前の学生にとっては重要な情報であり、講義者にとっても、授業選択に際して考慮してほしい点である。それを知らせるために、受講生の声を用いるのは、有効な方法ではないかと私は考えている。

■ 2. 誰のための、何のための評価？

私がこのような形で授業評価結果を活用しているのは、授業評価に対する私なりの考えからきている。それは、授業評価を行うことそのものが目的ではない、ということである。そもそも、「学生による授業評価」に限らず、あらゆる評価は、評価を行うことそのものが目的ではありえない。評価そのものは、何も産まないからである。評価を通して現状についての情報を得、それを今後活かす。授業評価とは、あくまでもそのための道具であり一つの手段にしか過ぎないのである。

したがって、授業評価の目的や位置づけに対する考えが共有される前に「授業評価」そのものをテーマに掲げて議論すること自体、本末転倒であると言わざるをえない。しかしそのようなテーマが掲げられることも、十分に成熟しているとはいえない今の大学改革の流れの中にあっては、しょうがない面もあり、また、そのようなテーマから出発して論じられることもあると思われるので、それを本稿を通して行おうと考える次第である。

授業評価に関して言うならば、その目的は何か、何のために、誰のために行うのかを考えることは必

要なことである。その問いに対する筆者なりの考え方は、上に現れている。すなわち、「誰のため」かといえば、授業者および学生のためである（さらには、教育全体を企画・管理する者も含められるであろうが、その点は本稿では論じない）。「何のため」というならば、授業者の授業改善のため、および、学生の授業選択のための情報提供である。

しかし、授業評価の目的をこのようなものと考えたとき、琉大で行われている現行の授業評価の制度は、十分とは言えない。それは、制度として規定されているのは、「授業評価を行う」ことだけであるからである。いわば、授業評価を行うことそのものが目的化されており、それをどう役立てるかは、各教員に委ねるといふ文言の元に、不問にされているからである。しかし、上記の2つの目的のうち、授業者に委ねられるのは「授業改善」のみであり、学生への情報提供は、本来、個人レベルで行うべきものではないにも関わらず、まったく念頭におかれていないようである。しかし現に、授業選択のために、授業評価結果を教えてほしいという声は、学生から出されている（大学教育センター報第6号p.47「学生の声 授業評価の公開を」）。この声に答えるためには、たとえば東海大学が行っているように、結果の公表に同意をした教員の授業評価結果を、冊子にして公表すればよい（安岡ほか著『授業を変えれば大学は変わる』 1999年 プレジデント社）。なお同書によれば東海大学では、各教員は授業評価のデータに自己診断書（コメントや改善目標）をつけて主任教授に提出し、そのデータを元に学科教員全員で授業改善に結びつける方法を撰る、という指針があるのだそうである。こちらは、授業評価を教員の授業改善に用いることをサポートする組織的な取り組みである。

これらは、現行の制度にさほど大きな手を加えることなく、授業評価の位置づけや意味づけを明確にするための改善策である。授業評価そのものが目的ではなく、情報提供や授業改善のツールと捉えるの

であれば、早急に導入することが検討されるべきではないかと思われる。

■ 3. 更なる改善のために

上に論じたように、現行の授業評価は変えずに、大学教育センターとして新たな組織的対応を少しつけ加えるだけでも改善できる部分はある。しかし、もう少し大きな変革も必要な部分もあるように思われる。最後に、そのことについて論じる。

先に述べたように、私は過去6年分ほどの授業評価結果（平均点、自由記述のピックアップ、私の反省）をWebページに載せている。しかしこの作業を毎年やりながら思うのだが、ここ数年の私の授業反省や改善に、数値評価部分は何の役にも立っていない。

というのは、特定項目の評価が低くても、その意味が確定できないために、利用しようがないのである。その理由は大きく2つある。一つは、どう対処したらよいか分からない項目が多数ある、ということである。たとえば、「テキスト・補助教材は適切」項目が低ければ、他のテキストを探すという対処が可能である。しかし、「学問に対する興味が増した」項目が低かったとしても、すでに私としてはできることは自分なりに十分行っているつもりなので、それ以上どうしていいのかわからない。

そのようなどう対処すればいいかわからない問題点を改善するためには、授業評価を行なうだけではダメで、対処法へアクセスしやすいことが必要であろう。たとえば『授業をどうする！ーカリフォルニア大学バークレイ校の授業改善のためのアイデア集』（東海大学出版会）のような本は、その役に立つかもしれない。しかし大学組織として必要なのは、そういう情報を組織的に持ち、必要に応じてアドバイスできるような体制を作ることではないだろうか。このような方法論の集積が、大学内部で学問分野ごとになされていくことは、授業改善の大きな力になるだろう。逆に、そういう情報がなければ、い

くら授業評価がなされたとしても、また教員に授業改善の意欲があったとしても、ある程度以上の授業改善は難しいであろう。

授業評価の数値部分が利用しようがない理由の2つめは、仮に何らかの手をうったとしても、数値の変動は、「手を打った」効果なのか、その他の要因によるものなのかが明確ではないという点である。私なりに努力した結果、確かに平均値は+0.3ぐらい変化する。しかし年度が変わると受講生も変わるので、何もしなくても、0.3ぐらいは変動する項目はある。このことから、よほど大きな改善でも行わない限り、数値評価は授業改善の役には立ちにくいといえる。

その他にも、私の授業の目的に照らし合わせたとき、私の授業の問題点を知るために必要な項目はないという点も、現行の授業評価フォーマットの問題点である。もっともこの点は、教員が自由に設定できる項目を作ることで対処可能である。

ただし、数値部分にも多少の意味はある。総合評価を数値で知ることができ、それが一定の値を出していることは、大きな励みになるということも否定できない。しかしそれも、「励み」や「確認」というだけであって、「改善」の役に立っていないのは間違いない。先に述べたように、私は授業改善のための情報源は、そのほとんどを自由記述から得ている。つまり私にとっては、授業評価は基本的に自由記述と、数値による総合評価程度でいいのである。

もし、自由記述だけでは心もとないとか、特に受講生に聞いてみたいポイントがあるというのであれば、5段階評価などではなく、チェックリスト方式で十分なので、もっとたくさん用意する必要がある。チェックリスト方式とはたとえば「早口である」のような項目を数十個並べ、当てはまるものにチェックをする方式である。それで、そう思っている学生の人数が把握できれば、十分である。その場合、チェック項目は、次のような要件を満たしていることが重要であろう。「私の授業目的や方法の特徴」に

照らし合わせて、そうであることが「望ましい（あるいは望ましくない）項目」。あるいは、私が「改善したい」と思っている項目のなかで、私自身が「自覚的に把握できない」、しかし、「学生がその可否を判断できる」項目である。私自身が自覚的に把握できる項目は、自分自身で自己評価すればいいわけだし、学生がその可否を判断できないと思われる項目は、他の教員に授業を見せて評価してもらうなど、学生による授業評価以外の方法を考える必要がある。

そもそも、「授業を評価する」とは、アンケートを取ることと同義ではない。評価は、知りたい内容に応じて、多面的になされる必要がある。たとえば「テストの結果」も、受講生が教授内容を身につけたかどうかを知るための一種の評価とみなすことが可能である。その他にも、先に挙げた教員の自己評価や他教員による評価以外に、教育の専門家による評価、授業への登録者数、出席率、などもある種の評価として利用可能である。これらはどれも、その授業のある側面を「評価」という形で浮き彫りにしてくれる。目標に応じて適切な評価を選び、評価結果に基づいて適切な処置を選択し、実行する必要がある。それは本来的には、教員一人一人がそれぞれに努力すべきことであるが、さらにそれをサポートする体制を大学内に設けることで、個人、組織の両面から大学の授業を改善していくことが可能になるのではないかと思われる。

以上まとめると、評価とは、目的に照らして行なわれるべきものであり、また、必要に応じて複数の評価を併用しつつ、総合的に行なわれるべきものである。少なくとも現在使われている授業評価項目は、こういう点について検討されることなしに作られているように見える。私自身の授業で、これ以上の改善を積極的に行おうと思うのであれば、現行の授業評価フォーマットではなく、自分で、自分に役立つ自分用の評価項目を作って使うしかないと考えている。しかしその前に、大学教育センターには、組織

として、各教員のニーズにあった、柔軟かつ多面的な授業評価のあり方について検討してほしいと思っている。

評価という言い方で言うならば、本稿自体が、現行の「学生による授業評価」およびその組織的対応に対する、利用者側からの評価という側面を持っている。この評価が、評価だけに終わるのではなく、今後の大学教育の改善や、そのための議論の手助けとなることを願っている。